

平成 22 年 4 月 24 日現在

研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2006～2009
 課題番号：18320116
 研究課題名（和文） 中央ユーラシアにおけるイスラームの展開-初期の伝播から現在の再生まで
 研究課題名（英文） Islam in Central Asia: from the first transmission to the revival in recent times
 研究代表者 濱田 正美 (HAMADA MASAMI)
 京都大学・大学院文学研究科・教授
 研究者番号 30109061

研究成果の概要（和文）：中央ユーラシアにおけるイスラームの歴史的展開の全体像を通時的に把握することを最終目標として、歴史地理、イスラーム神学、イスラーム神秘主義哲学、文化史など、従来概ね歴史研究からは等閑視されていた分野に関する知見を組み込んだ歴史像を描く可能性への橋頭堡を築いた。

研究成果の概要（英文）：Aiming to grasp holistically and diachronically the development of Islam in Central Eurasia, our project has established a firm bridgehead for making a new historical image by means of combining the knowledge of the pure historiographies with those of other disciplines like Islamic theology, mystical philosophy and historical geography of the region concerned.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成18年度	4,400,000	1,320,000	5,720,000
平成19年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
平成20年度	2,700,000	810,000	3,510,000
平成21年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
総計	13,900,000	4,170,000	18,070,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学、東洋史、中央ユーラシア史

キーワード：中央ユーラシア、イスラーム、神学、教理要綱、スーフイズム、中国ムスリム

1. 研究開始当初の背景

中央ユーラシアにおけるイスラームに関する諸問題は、ソ連邦の解体の後に成立した諸国家におけるその「再生・復興」現象によって改めて研究者の注意を引くところとなり、当該地域のみならず、ロシアを含む欧米と我が国においても急速に研究が展開し始めた。就中我が国にあっては、始め東京大学ついで早稲田大学を中心拠点として推進されているイスラーム地域研究の一環に中央アジアも組み入れられたため、プロジェクト参加者

による多くの業績が生み出されることになった。ただその研究は、例外はあるものの、概ね19世紀以降の時代に集中し、この地域におけるイスラームの展開を通時的に把握しようとする視点を欠いていたように思われる。しかし、過去においてこの地域で主流であったイスラーム信仰/思想や宗教実践の特質を問うことなしに現在の「再生」を議論することは、ある意味で無謀な企てに終わると言いうるであろう。

2. 研究の目的

上に述べた認識に基づき、本研究は中央ユーラシアにおけるイスラームの展開を可能な限り個別具体的な歴史的事実に立脚しつつ、同時にまた能う限り巨視的、通時的に把握することを目的とした。その際重要な論点として、(1) 歴史地理学的な観点から見たイスラーム伝播期の中央ユーラシア、(2) この地域において最初に確立されたイスラーム教学とその後の展開（早くに伝えられたアブー・ハニーファに発する教学とその後のマートゥリーディー派神学の成立と展開）、(3) ホラーサーンとマーワラー・アンナフルにおけるスーフイズムの出現と隆盛、(4) ステップ出自の遊牧民とイスラームの関係（とりわけ定住地帯を政治・軍事的に支配した遊牧君主と定住民の宗教指導者との交渉、遊牧民の改宗の問題）、(5) モンゴル支配時代に始まる一般信徒向けの教理要綱書の盛行、(6) イブン・アラビー流の「存在一性論」のこの地域における広がり、(7) スーフイズムと正統教理との併存の様相、(7) 以上の諸点の考察を通じた現在の「再生」の議論に関する分析、の諸問題を設定した。

3. 研究の方法

以上に列挙した諸問題について関連する文献研究を主体として、研究代表者と研究分担者が、各自の専門領域に含まれる、もしくは隣接する問題を担当する。即ち、研究分担者・稲葉穰は問題(1)に関連して前イスラーム期からイスラーム期に移行する時代のアフガニスタンの情勢、研究分担者・東長靖は問題(6)について、「存在一性論」のイスラーム世界全体への波及、研究分担者・久保一之は問題(4)との関連で、ティムール朝の文化特に文学作品に顕れた政治思想と宗教思想、をそれぞれ分担した。研究代表者・濱田正美は、研究分担者の成果を総括しつつ、問題(2)(3)(5)(7)を主として担当した。研究の遂行に当たって濱田は、従来主として歴史学研究者の側から為されてきた中央ユーラシアのイスラーム史研究が、概ね年代記などの純粋な歴史文献に依拠して、いわゆる狭義のイスラーム学の対象となる文献についてはほぼこれを等閑視するとともに、イスラーム学が挙げてきた業績に注意を向けることも稀であったという反省にたち、極力イスラーム神学書、スーフイズム思想文献、教理要綱書等に視野を拡大し、ユーラシア史研究に宗教思想史を組み入れることを企図した。

4. 研究成果

研究分担者のうち、稲葉は、中央アジアと南アジアの境界地帯について、歴史文献と最新の現地調査に基づく複数の業績を発表した。久保は、ティムール朝の大詩人アリー・シール・ナヴァーイーの社会史の史料としても興味深い作品のラテン文字転写による校訂テ

クストと翻訳・注釈を刊行した。東長は、「スーフイズム・アンソロジー・シリーズ」と題して、重要なスーフイズム文献の解題・翻訳を継続的に公刊するとともに、400ページを超える『イブン・アラビー学派文献目録』を編纂して、今後の研究を展開する基盤を形成した。研究代表者・濱田は2008年に、初期の伝播から現代に至る中央ユーラシアにおけるイスラーム全般について、その通時的な展開の大筋を『中央アジアのイスラーム』に纏め刊行した。「イスラーム信仰の定式化」「中央ユーラシアへのイスラームの伝播」「スーフイズム、モンゴルの侵入とその後」の章からなるこの単著は、短篇ながらいわば本研究の梗概ともいべきもので、年来の見解を一般向けに紹介したものであるが、専門研究者に対しても様々な問題を提起するものであった。そこにおいて濱田が提起し、その後も展開・深化しつつある諸問題とそれに対する見解は以下の通りである。

(1) アブー・ハニーファに発し、やがて「スンナとジャマアの民」の共通の教条とされるにいたる教理は、中東よりむしろホラーサーンとマーワラー・アンナフルで形成されたものである(上記問題(2)に関連)。

(2) マートゥリーディー派神学として成立することになるこの東方の教理学は、当初より穏健、中庸を特徴としており、政治権力に対しては妥協的であった。こうした特徴は、恐らくは不信者もしくは新たな改宗者であったテュルク・モンゴル系の政治支配者をイスラームの枠組の内に引き込むという喫緊の要請に由来する(上記問題(2)および(4)に関連)。

(3) モンゴル支配時代に至って、教理要綱書がペルシア語で著されるようになった背景には、遊牧民に出自する新たな改宗者の存在のみならず、一般の定住民の間におけるイスラーム信仰の定着と深化という現象が想定される(上記問題(4)(5)に関連)。

(4) 前項のいわば大衆化された教理要綱書は、地域的には中国からアナトリア、ウラルからインド亜大陸に広がるスンナ派イスラーム世界の全域で受容され、同時にそこに説かれる教説は、様々な聖者伝に採り入れられて奇跡譚と併存し、民衆の宗教的知識を構成した(上記問題(5)(6)に関連)。

年代記、神学文献、聖者廟への巡礼案内書という異なる性質の諸文献の読解を閉口して進める過程で、これら文献が相互に言及することはないものの、これらを重ね合わせることにより、特定の歴史現象を明快に説明することが可能であるとの見解に至った。その一例が2008年の東洋史研究大会において発表した政治権力者の埋葬と最後の審判における執り成しという宗教思想との関わりの問題である。この発表において濱田は、先ず

ティムール自身及びその一門の墓が聖者の墓廟に隣接して営まれている事実を年代記と巡礼案内書から確証し、継いで中央アジアのマートゥリーデー派神学の教説が、初期には最後の審判に際しての執り成しの権能を与えられているのは預言者ムハンマド唯一人であるとしていたマートゥリーデー派神学の教説が、聖者たち一般もこの権能を有しているという説に次第に変化し、ティムールの時代には聖者たちが自らの葬られている墓からある一定の距離を執り成す、すなわちその範囲に葬られている人々を天国に導くという観念が成立していたことを明らかにした。神学説の変更を、遊牧民出自の権力者および民衆の救済願望へのすり寄りと結論づけるには尚早であるとしても、この変更が外ならぬ中央アジアの環境において発生したことの意味は小さくない。

『東トルキスタン・チャガタイ語聖者伝の研究』を2006年に刊行した際、濱田はこれら聖者伝に含まれる聖者が新たなモンゴル人の改宗者に向かって教義を解説するという物語のうちに、正しくマートゥリーデー派の教義がそのまま言及されている事実に着目し、その流伝の経緯を追求した。その結果、16-17世紀に成立した聖者伝と11-12世紀にアラビア語で著された神学書の間を、12世紀以降盛んに著作されたペルシア語の教理要綱書が媒介しているとの認識にたっした。これらペルシア語の教理要綱書のうち代表的なものが問答体で記された『チャハール・ファスル』と『ムヒンマート・アル・ムスリミン』である。これら2書は遅くとも明代のうちには中国にまで流布し、明末清初には漢訳され始めた。中国ムスリムの間でこれらの書は極めて尊重され、版を改めての刊行と新たな訳の上梓が繰り返されて来た。現在に至ってもこれらの書物に対する尊重は不変である。中国のムスリムがこれらの書を原型に比較的忠実に継受しつづけたのに対し、中央アジアでは書物の題名こそ維持されたものの、内容には大幅な改訂、改編、増補が加えられた。濱田が偶然の機会に入手した1882年に作成された写本はその一例であって、そこに含まれる問答の数は、明代に中国に伝えられたテキストに比して、『チャハール・ファスル』では2.5倍、『ムヒンマート・アル・ムスリミン』では実に11倍に達している。この写本の問答は、元のテキストに見える信仰、神の認識、礼拝、沐浴の正統教義（オーソドキシ）と正統行為（オーソプラクシ）に加えて、所願成就のための祈祷の文句に関するものも含まれ、更には背中に垂らすべきターバンの端の長さ、楊枝を使う際に上の歯から始めるべきか、下からすべきか、妻がどのような状況に至ればその夫は不貞をはたらかれたことになるか等々、シャ

リーの規定に含まれるもの、あるいはそれ以外の儀礼（アダブ）の範疇に含まれるもの、更には中央アジア固有の生活慣行に関すると思われるものなど、極めて雑多な問題について手の問答が含まれている。従って、このテキストは民衆に近いレベルでの「日常のイスラーム」に関する第一級の資料であるとの判断に達し、その校訂テキストを、成立当初の携帯に近いと思われる石印本のファクシミルと合訂のうえ、本科学研究費助成研究の成果として刊行した。イスラーム思想史のみならず、社会史の資料としては勿論、現在の生活慣行との比較研究の資料として民族学研究をも裨益するところがあると思量する。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計5件）

- ① 東長靖 「クシャイリー『クシャイリーの論攷』より「スーフィー列伝」解題・翻訳ならびに訳注」『イスラーム世界研究』査読無 3/2, 2010, 406-415 ページ
- ② 久保一之 「ナーヴァーイー（ミール・アリーシール）の社会観 —Mahbūb al-qulūb 第1章日本語訳（付．ローマ字転写校訂テキスト）—」『京都大学文学部研究紀要』査読無 47, 2008, 183-295 ページ
- ③ 濱田正美 「北京第一歴史檔案館所蔵コーカンド関係文書9種」『西南アジア研究』査読有 68, 2008, 82-111 ページ
- ④ 磯貝健一、矢島洋一 「ヒジュラ暦742年カラコルムのペルシア語碑文」『内陸アジア言語の研究』査読有 22, 2007, 119-156 ページ
- ⑤ 稲葉穰 「ヤカウラングとリバーテ・カルヴァーン-ハザーラジャート北部の歴史地理」『オリエント』査読有 50/1, 2007, 63-79 ページ

〔学会発表〕（計5件）

- ① Inaba Minoru, Between Zabulistan and Guzgan: Some Issues Related to the Historical Geography of Pre and Early Islamic Afghanistan, Crossing Borders: Pattern of Exchange across Afghanistan, Pakistan, India and Central Asia, 2010/3/15-16, ウィーン大学芸術史研究所（オーストリア）
- ② Inaba Minoru, Sedentary Rulers on the Move; Travels of the Early Ghaznavid Sultans and their Cities, Turko-Mongol Rulers, Cities and City-Life in Iran and the neighboring Countries (Japan-Germany Joint Seminar), 2009/9/11-12, 東京大学東洋文化研究所
- ③ 濱田正美 聖者の執り成し-死のイスラーム

ム化か、イスラームの土着化か、東洋史研究大会、2008/11/3, 京都大学

④小野浩 HWDBRY-hūdābūri? 14-18 世紀ペルシア語文献中の難解語、東洋史研究大会、2007/11/3, 京都大学

⑤Hamada Masami, Imaginary invitation to the pilgrimage, International Conference “The Roads of pilgrimages between Central Asia and Hijaz”, 2007/10/3, Tashkent, Uzbekistan.

〔図書〕(計 5 件)

①東長靖、中西竜也『イブン・アラビー学派文献目録』437 ページ、京都大学イスラーム地域研究センター、2010

②濱田正美、塩野崎信也、Chahār Faṣl (Bidān), Muḥimmāt al-Muslimīn, 17+145+35 pp. 京都大学大学院文学研究科、2010

③濱田正美『中央アジアのイスラーム』(世界史リブレット 70)、90 ページ、2008、山川出版社

④濱田正美 (共著 紀平英作編)『京都大学文学部創立百周年記念論集 グローバル化時代の人文学 対話と寛容の知を求めて上 連鎖する地域と文化』478 ページ(53-82)、京都大学出版会、2007

⑤濱田正美 (共著 京都大学人文科学研究所編)『中国宗教文献研究』482 ページ(447-458)、臨川書店、2007

6. 研究組織

(1) 研究代表者

濱田 正美 (Hamada Masami)

京都大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：30109061

(2) 研究分担者

久保 一之 (Kubo Kazuyuki)

京都大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：70221934

稲葉 穰 (Inaba Minoru)

京都大学・人文科学研究所・教授

研究者番号：60201935

東長靖 (Tounaga Yasushi)

京都大学・大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・准教授

研究者番号：70217462

(3) 連携研究者

小野 浩 (Ono Hiroshi)

京都橘大学・文学部・教授

研究者番号：40204250

矢島 洋一 (Yajima Yoichi)

京都外国語大学・国際言語平和研究所・研究員

研究者番号：60410900

